

撤退作戦に散った戦友たち

岩手県 長澤 龍次

現役入隊・満州に転属

昭和二十（一九四五）年の満州の夏は大変な暑さだった。

私らの所属部隊は、当時の内蒙古、外蒙古と接した西部国境に位置する地に駐屯、防衛警備に当たっていた。

西部国境の警備は、第一〇七師団（師団長安部孝一陸軍中将）の隷下に、師団司令部、歩兵三個連隊、野砲、工兵、騎兵、輜重、各一個連隊、師団通信他諸隊等で編成されており、開戦時の総兵力一万三千余人であり各部隊は西部国境一帯に配備され、それぞれの任に当たっていた。

私は、その年の二月、弘前の部隊に現役入隊。直ちに満州第二〇一部隊（歩兵第一七七連隊）に転属になり、黒竜江省西部の主要都市「チチハル」

の南方約三十キロ地点に位置する「昂昂溪」^{コウコウケイ}の第二大隊第五中隊に編入配属された。立派な煉瓦造りの兵舎だった。この地において厳しい教育、激しい演習訓練を受けることになった。

その後、西部国境に近い「徳伯斯」^{トボス}に移駐したが、兵舎は半土掘の三角兵舎であった。六月下旬開拓演習（野戦陣地構築作業）の為、本部のある「五叉溝」^{ウサコウ}西南の国境山中で作業に従事すると共に国境警備の任に就いた。

我が中隊の中隊長は、鈴木武雄陸軍中尉（岩手県・前沢町）であり、中隊付に岡部敏也見習士官（東京美校出身・帝展入選・山形県）、指揮班長・大石藤四郎陸軍曹長（秋田県・田沢湖町）が幹部であり、隊員数は二月に入隊した我々初年兵のうち、八月一日南満地区の新設部隊に半数近くが転属してその残りが主体で、六月に在満の年配召集兵の若干と、七月に入隊した朝鮮出身兵が約二十人、そして下士官、古年次兵合わせて総員百五十人ほどだった。七月の下旬にはその朝鮮兵のうち、

七人程が真夜中脱走して非常呼集がかかり、付近を捜索する騒動もあり、また越境してきた外蒙のスパイが捕まる事件が発生したなどと「回報」があり緊迫した空気が流れていた。

日中、四〇度の炎天下、上半身丸裸で作業に従事。夜になると気温は零度近くまで下がり、夜間の前線の歩哨や動哨は、外套を着用して勤務するという状況だった。

ソ連不法侵入・開戦

八月九日は、朝から雲ひとつない晴天で今日も暑い一日になるだろうと兵舎から事務室（三角兵舎）の勤務に向かったところ（七時か八時頃）、上空五千メートル位を金属音を響かせ飛行機三機、北東の方向に飛来していくのが目撃された。平時飛行機等は全く飛来することのない平穩？ な地区だけに異様な感じをうけた。

事務室から人事係の大石曹長（秋田県・田沢湖町）らが出てきて「ソ連のミグ」のようだと言っ

ておった。曹長はじめ下士官達の多くは「張鼓峰」チョウコホウの戦いに参加したといわれておりすぐ判ったのであろう。まもなく部隊本部からソ連侵攻開戦の報告と共に、中隊は武装を整え山頂近くに移動、応戦体制を命じられ直ちに配備に就いた。野戦糧秣倉庫からも食糧をはじめ戦闘に備えての必要な物資が迅速に支給され、夕食時には開戦の緊張の中にも、どんな戦になるのだろうかと話し合い、不安もチョッピリ抱きながらの食事だった。

そんな状況の深夜、十二時ごろ、現役入隊者四〇五人が中隊に配属になった。暗くて見えにくかったが学校の後輩の村田悌一君と中村恭二君が居た。お互い驚いた。今年三月卒業とともに、新京の関東軍司令部に軍属として就職勤務しており「八月一日入隊通知がきて今着きました」とのこと。まずは腹拵えと、炊きたての野戦食を存分に食べてもらった。満足したようだった。そして配属中隊に先輩がおったという事が彼らには、何らかの安堵感を得たようだった。彼らとは小隊が違

つたが中隊の一員として「西口」ハマコーザ、
「号汁台」と「興安嶺」の山中を戦闘行軍と、行
動をともしることになった。

部隊本部は、国境約五十キロ地点の「五又溝」
と言うところがあり、市街地は、爆撃をうけ戦火
のなかにあるという情報だった。

本部よりの命令は、二転三転し、結局中隊は現
在地より撤収し、速やかに部隊本部まで移動せよ
という命令が下された。

陣地の山から本部までは直線にして三〜四キロ
位はあったと思う。十日の朝二時頃、完全武装と
共に雑囊には予備として小銃弾、米等詰め込み、
更に私は、背囊の上に、擲弾筒を載せ、弾筒帯を
腰に付し、その総重量は六十キロを優に越える重
さだったと思った。その時は、それに耐え得る体
力、気力が十分、余力さえあったように思えた。

本部のある「五又溝」は、戦火で騒然としてい
た。

本部命令は、部隊は師団と共に「新京」まで（鉄

路約七百キロ余）撤収を行う。五中隊は、部隊の
軍旗中隊となり軍旗の護衛にあたり部隊本部の指
揮下に入り、五中隊を除く二大隊は、部隊の撤退
路の確保に当たるべく、軍用列車にて「素倫」に
急行すべしということだった。

部隊本部と行動を共にする我が五中隊は戦闘体
制の編成が行われ、敵機甲部隊、敵機の攻撃を避
けつつ昼夜行軍が行われた。

当初の行軍は心身とも疲労はなく余裕があり、
大休止には、分隊ごとの飯盒炊飯も行われておっ
た。行軍中には、隊員の確認点呼なども実施され
ておった。十三日明け方「西口」に到着した。直ち
に部隊本部を中心に各隊は、戦闘配備態勢に入り、
設営作業が行われた。十三日午後、敵機二機が飛
来し、丘上には戦車が現れ、いよいよ実戦かと緊
張し、ひととき騒然（喚き声・武者震い？）とな
ったが直ぐ落ち着き平静に戻った。

すでに先行出発した第一大隊、第三大隊は、「西
口」付近（五又溝より南南東三十五キロ地点）に

において敵の機甲師団と遭遇、激戦中との状況報告があり、第一大隊猪俣大隊長は奮戦中重傷を負い藤田軍医中尉戦死、多くの犠牲者が続出しておることが部隊長に報告があったと知らされた。

肝っ玉が座ってしまえば怖さも恐ろしさも、消えてしまうのかも知れない。来るなら来いという気持ちになった。敵戦車からまもなく威嚇射撃があり、斜め約二メートル前方に着弾、一瞬ハッとしたが被害は無かった。着弾がちよっと右にずれておれば、私らが入っていた蛸壺付近に命中し危なかったなと思った。人の出入りが目立つ本部付近を狙った攻撃のようだった。

緊急配備されておった肉薄攻撃班も一時緊張が走ったが、戦車は更なる攻撃の気配もなく後退し姿を消した。

西口の激戦・興安嶺山中への転進行軍

これより先（八月十二日）、部隊の後方に敵の襲撃に備え爆雷を背負い行軍中の五中隊の戦友、

佐々木睦郎、速応功、両君が低空で飛来した敵機よりの機銃掃射を受け壮絶なる戦死を遂げた事が同行の石川兵長により報ぜられた。中隊の初めての犠牲者だった。

十四日夕刻「西口」の戦闘において重傷を負った猪俣大隊長が、戦火のなか佐々木清三伍長（盛岡市・加賀野）らの担架で米本部隊長に戦況報告に來られた。軍刀を頼りに立ち上がるうとするのを部隊長は制止された。

大隊長は、激戦の状況などについて、苦しみを堪えながら報告されておられた。

昼夜を分かたぬ激戦が繰り返られ重軽傷者続出、敵の放つ照明弾、曳光弾は真昼のごとく明るく数キロ離れた本部の置かれた地点まで遠く火花のように明るく望見された。

第一線は、夜間攻撃を決行、受傷者を乗り越え濃霧の中、突撃ラップとともに敵の熾烈なる銃砲火のなか猛攻が重機隊の援護と共に繰り返し行われた。戦闘は、十三、十四、十五の三日間敵と激

戦を繰り返しつつ対峙しておったが、十五日に入り敵は徐々に後退し始めた事が確認された。後日、猪俣大隊長の記述によれば、師団は、同日、夜陰に乘じ、降りしきる雨の中、「西口」を脱し「興安嶺」の山中の村落ハマコーザへと撤進がはじまったのだという。

激戦を経た兵士も、疲労が溜ってのこの行軍では雨の中での「小休止」でも路肩に仰向けにひっくり返り、殆どの兵士らは五分でも十分でも眠って回復に努めた。「出発」の号令があっても起き上がらず隣の者が起きて歩き出し「歩くのだぞ」と言う掛け声で起き上り歩きだすのが現実だった。この時点では、人員の確認、点呼はもう省略されておった。

その時私は熟睡してしまい、眼が覚めたときは雨中の周囲には、誰ひとりおらず、「興安嶺」の山中にただ一人取り残されておったが不思議にも不安感も恐怖感もなく、早く隊に追いつかなければと起き上がり前方に歩み始めた。十五分〜二十分

位歩いたところ、ようやく最後尾の小部隊にたどり着き一安心。更に十分位歩き山上に大休止中の「軍旗護衛隊」に追いつき菅連隊旗手に遅れてただいま到着したと報告をした。菅連隊旗手は皆と一緒に行動していたものと思っておられたようだった。「ガンリンは持ってきたらうな」と言われ、さっきの眠った所に忘れてきたことに気付いた。

私は、ガンリンを携行する任務であった。ガンリンは、ビール瓶に紙栓をし紐で結え肩に掛け手で支え歩んでおり、重要さの割に正直厄介な荷物だった。直ぐに今来た道を疲れも忘れ早駆けで取りに戻った。

途中で友軍のトラックや、軍用車両がエンコしたのだから数台放置されておったので警備の兵に事情を話しガンリンをもらう事にしたが、付近に適当な容器が無かったので自分の水筒の水を捨て給油し、隊に帰り早速菅連隊旗手に報告した。

雨が続き、携帯の食糧も乏しくなった。護衛隊長が「誰か食糧を持たぬか」と問うた。私は雑糞

に小銃弾の外、軍足に詰め込んだ米二本残っていた。陣地の山を降りる時、「米は、十分持てよ」と言う下士官の忠告に従って軍足六本ほど背のうと雑のうに米を詰め込み出発した。軍足一本に約一升入ると言われていた。

私は、米を差し出し他の者の分などと合わせ炊飯し、菅連隊旗手をはじめ全員で食した。これが作戦行動中の最後の飯盒炊飯の米食だった。

滞在中のハマコーザにおいて部隊の一部編成替えがあった。重傷を負った猪俣大隊長に代わって鈴木五中隊長が大隊長代理となり、岡部見習士官が五中隊長代理に発令された。又「西口」において損耗があった第二中隊に我が五中隊より一部が転入され、他若干の再編があり、体制が整われた。

ハマコーザ出発の頃、私は、手の傷が悪化し、任務遂行が困難と感じ、護衛隊長に下番を申し出て、隊に復帰した（後日「音徳爾」において終戦後軍旗が奉焼されたことを知り、自分の水筒に入れたガソリンがお役に立ったのではなからうと感

慨深かった）。

「泥水啜り・草を食む」の行軍

四〜五日ハマコーザに滞在、体制を立て直し、八月二十日暗夜に再び行軍が開始された。携帯口糧すでに無く、周辺の草むらから、「アマドコロ」「アカザ」など採取し食糧とし空腹を凌いだ。

疲労極限に達した我々は、興安嶺の山林を夜を日に継いで無言で肅々と歩む。何がなんでも隊列から落伍してはいけなさと自分に言い聞かせながら、皆黙々と必死にただただ歩む。行軍中力尽き、路端に仰向けに倒れておる戦友らの姿が散見された。「ガンバレ、もう少しだ、歩くんだ」声をかける。そして俺は、そんな姿には、絶対ならんぞ！「根は、頑健な体なんだ！負けてたまるか」と気持ち奮い起こさせた。三角布で腕をつり、銃を肩にかけ、骨と皮のみの泥だらけの身ではあるが、たとえ三日四日食がなくても倒れんぞ！頑張るんだ。身体はどこからかいつも奮い立たせて

くれた。「今に見ておれ！　こん畜生！　負けてたまるか！」　黙々と歩む。誰もがそんな気持ちを保持って行軍しておったに違いない。

倒れている戦友は水をくれと叫び続けたが、我々にもすでに水もなく、路にできている「轍」に僅かに溜まっている水に群がってすすり飲んでいる状態では、水をくれることもできなかった。そんな行軍中いつも故郷「もりおか」のこんこんと湧きでる名水「御田屋清水」を思いだし、存分に飲み、乾いた喉を潤してみたいと思いつながら疲れを紛らせて歩いた。皆、故郷の湧き水を思い出したに違いない。

下痢症状に襲われ疲れた体は、ますます疲労を増し瘦せてしまう。携帯の「征露丸」を飲んでも治まらず必死に落伍せぬよう黙々と歩んだ。

そんな中、友軍の軍用トラックが悪路を揺れながら通過していった。

乗っている連中は、歩くこともなく楽だろうなと思いつながらトラックを眺めていた。全くの偶然、

級友「早野麟太郎君」（岩泉町小本）が乗っていた。お互い気が付き、手をふり、「オーイ元気が頑張れよ」と叫んだ。とにかく無事を確認し、互いに喜び合い更なる武運を祈った。彼は、弘前の騎兵部隊に我々と同日入隊しハルピンに居ると思っていたが、やはり国境に移動しておったのだった。なにしろ一万分（当時の師団の総人員概数）の二の奇遇には驚いた。

行軍は、三々四日続いた後、農道に出ていた。

人里らしい感じがした。近くの農民が丹精込め作った畑にトウモロコシ、ジャガ芋、ささげ豆等々畑いっぱい実っていた。空腹には勝てない、われ先にと疲れも忘れもぎ取り、岩塩と共に生でかじりながらの行軍が続いた。

行軍の途中、急流の幅五メートルぐらいの河に出た。三々四人で押し流されぬよう肩に銃を乗せ互いに腕を組み渡河を行い、衣服も身体も干す暇も無く歩む。半日歩めば自然に乾き洗濯されたような感じだった。

明るくなった山野を歩み、行軍は草原の丘陵地帯へと進んでいた。そんな頃、遠く近く砲声が聞こえ始め、間もなく行軍中の我々の頭上を音をたて砲弾が飛び交うようになった。いよいよ来たなと思いつつ砲音に身を伏せながら着弾の遠近の判断もでき、行軍が続いた。「号什台」を指しての行軍であった。

号什台の戦闘そして、音徳爾へ

小さな丘陵で眼が覚めた。大きく小さく砲声、銃声が聞こえた。

すぐ隣に同じく寝入っていた「菊池剛」君を起こし周囲の状況を見回した。やや右前方に我々の小隊が戦闘配備にしていた。敵の狙撃を避けつつ小隊に合流した。八月二十五日午後いよいよ戦闘に入った。状況はすでにソ連の機甲部隊、狙撃隊などの一個師団が広範にわたり我軍の進路を遮断すべく攻撃体制に入っていた。我が米本部隊長の著述によれば「師団長は、遂に攻撃に決せられ

午後四時第九十連隊を左第一線に、我が連隊を右第一線とし当面の敵を攻撃すべし」と命ぜられた。

「戦線は、熾烈を極め、敵の猛砲火を浴びながら猛進、更に夜間攻撃を行い敵陣を攻略すべしとの師団長命令をうけ、暗夜に乘じ敵陣地左側背に迫りこれを奇襲、銃剣を奮つて敵第一線を突破更に敗走する敵を攻撃、敵陣を占領軍旗、砲、車両等捕獲、数十人の捕虜を捕らえた。我が方も激戦の中第九中隊長直江中尉始め若干名の戦死者を出した」と、米本部隊長が記述されておられる。又、この戦いにおいて五中隊長代理の岡部見習士官も激戦の中銃砲火を浴び戦死され、親しかった高橋駿彦君も壮絶なる戦死を遂げたと後で聞き残念でたまらなかった。

所属する小隊は、部隊本部と共に行動、二十六日午後、七く八百メートル先の丘陵に彼我判明しない小部隊を発見、双眼鏡で観察の部隊長は、敵に間違いなしと判断され、歩兵砲隊に攻撃発射を命ぜられた。正確なる着弾で敵を殲滅し、右往左

往する敵軍の敗走の様子とこれを撃滅する友軍の姿がみえ喚声が上がった。

日没から夜間にいたり師団全員（その時八千人といわれる）敵を撃破した「号什台」を後に東進を開始「音徳爾」平野を目指した。

二十八日早朝「音徳爾」に到着した。ここで、部隊は、体制を整えるべく宿営することとなった。

民家の一つが我々分隊に与えられた。その庭先で白いあご髭の老主人が、無表情に、黙って蒸したての豚の頭の毛をむしり取って居った姿が寂しそうでなぜか印象的だった。

しばらくの間、休養できるものと誰もが思っていたようだった。

一夜の安眠は行軍中の疲れを一気に取り除き体力が回復したように思えた。

停戦となり、日本の敗戦を知る

「音徳爾」へ到着した翌八月二十九日朝、日の丸の複製飛行機より停戦を知らせる「ピラ」が散布

され次いで草原に着陸した。間もなく前方の道路を一台、白旗を掲げた自動車走り去った。ソ連との停戦の部隊命令が達せられ同日夕刻までに武装が解除された。

聞くとはなしに、「日本は敗れ連合軍下にある」と噂が流れていたが現実となった。

三十日朝、猪俣大隊長が傷も癒えぬ中、隊員を前に終戦の詔勅を奉読され、爾後、ソ連の管理統制に入るが軽挙妄動を慎むという意味の訓示があった。

かくしてソ連の管理統制に入り「興安」を経てかつて駐屯し、開戦と共に激戦地となった、「徳伯斯」に向け行軍が強いられた。行軍中「徳伯斯」付近の激戦において戦死されたと思われる多くの遺体が散見された。手を合わせ通り過ぎた。

集結後あらためて同地において連隊の合同慰霊祭が全員参加のもと執り行われ、亡き戦友の安らかならんことを祈願した。

半月余滞在の後「徳伯斯」より「チチハル」南

方「小民屯」(旧貨物廠跡)に移送集結させられた後、「東京ダモイ」と称し実はシベリアへと、ここから作業隊が(一個大隊・一千五百人)編成され十月半ば酷寒の地シベリアへ強制抑留者として送られる事になった。

「チチハル」周辺には、血色もよく一装用の軍服を着用し、疲れ切った我々の真つ黒な軍装に怪訝そうなまなざしを向ける兵らがおった。終戦直前南満や遠く北支から来た部隊と後で知った。

かくして苦難の戦いは、終わった。

思えば開戦と共に我が第五中隊は軍旗中隊となり軍旗の護衛の任に当たり、無事守護の任を全うし、軍旗の安泰を得た事は、「西口」「号什台」の戦闘における各隊の協力、活躍奮戦によるものであり、栄えある軍旗は「音徳爾」において八月二十九日連隊長より部隊全將校集合させ終戦命令の伝下達後、軍旗に対する最後のお別れをなし、全將校見守る中、奉焼され、歩兵第一七七連隊も、その幕が閉ざされた。

ハルボン収容所

昭和二十年十一月十五日、一〇七師団本部・輸輜重隊の残部隊そしてチチハルの陸軍病院関係者、入院患者(軽症患者を主とする)らも含め、また、二〇一部隊の軽受傷者若干も加わり、八〇〇人の編成をもつて、いわゆる「東京」ダモイ(帰る)が実施された。

防寒帽、防寒外套、防寒靴に身をつつみいよいよ出発である。

貨車一両に、二段式改良車に七十〜八十人位詰め込まれた。

日本に帰るのだから少々我慢しようと言う者、いや汽車は北に向かっていると鉄道標識を見て確信ありげに言う元鉄道員、皆は不安げに体をよせあつて身を天に委せる外なかった。

十一月二十二日、下車が命ぜられた。陽が落ちて暗闇である。

やはり、「東京」ダモイは嘘だった。いよいよシベリアに抑留されるのかと覚悟をしながらも、一

体どうなるのか、いつ日本に帰れるのか、そんな不安がよぎったが詳しく考える余裕などなかった。この地方は白夜地帯であった、時間的には夕方だったろうか。

ロスケの「ダワイ・ダワイ（急げ）」の喚き声にも寒さのため俊敏を欠きノロノロ歩きだす。二〜三キロ歩いた小高い所に白っぽい建物があった。「ストイ」ロスケの掛け声で止まった。

ここが収容所ようだった。「やれやれここに収容されるのか」と諦めた途端忘れかけていた寒さが急に襲った。氷点下四〇〜五〇度はあったろう。「黒パン」が支給された。一斤位の「パン」は凍って切ることができない。叩いても割れない、砕くこともできない。結局「鉈」（タポール）で砕き、目分量で分配された。

支給されたものの凍ってかじる事ができず、口のなかで溶かしながら食べたが、食べた気がしなかった。口の中には、燕麦の滓が残った。

ソ連側の連絡不十分で建物の中に入る事ができ

ず、数時間余氷点下四〇〜五〇度もする外庭で待機させられた。なお、輸送中に五人が亡くなったと言われていた。待機中には緊張していたのか亡くなった者は、おらなかつた。この日から抑留生活が始まったのである。

「チタ州・ハルボン」と言う山林地帯の小寒村だったことが後で判った。数時間待たされ、入居した最初の収容所の部屋は二階だった。

畳一枚ぐらいに六〜七人で横になることもできず互いに体を寄せあつて休んだ。寒さも加わり一睡もできなかった。そんな状況も徐々に改善されながら、しばらくして（三カ月位）一階広間（三教室位の広さ）を区切り畳一枚弱位の居住区が与えられ、小隊単位とし、通路部分も区切られ気分的に楽になった。

「ハルボン収容所」の推定緯度

◎北緯 五三度

◎東経 一一七度 付近

旧ソ満国境・満州里より北方直線
約二八〇キロ地点

帰国後、雑誌の付録地図で大雑把に測ってみたところ以上の様だった。

ここに入った作業隊（抑留者）の隊長は元ハイラル第十九師団砲兵隊大隊長林田少佐と記憶しておる。

二〇一部隊の猪俣大隊長も居られたと後日知った。早速、抑留隊員の身体検査が行われた。作業隊員の等級は、検査により四区分に決められた。素裸になって検査室に入りソ連の軍医（二十四、五歳の女医）外、係官二、三人の前に立ち行われた。女医が尻を引っ張り、張り具合で体格の良さを重点に判断された。検査は約二カ月に一度行われた。

日本の山下、小花沢、両軍、日下通訳他も立ち会われたように記憶している。キンキラ声の女医さんの「イツキュウ」、収容所付きのジャッキー准尉の「ツギ」、で等級は決まった。

肋膜等、内部疾患の人は気の毒だった。日本の軍医さんの診断も女医さんには通じなかったようで、聴診器も用いなかった。

検査の結果は、次のように区分けされた。

等級区分

一級 頑丈そうに見える者
二級 一に準ずる者

三級 体力ややおとる者

OK ^{オカ} 痩せてアバラ骨が見える者

等級別作業

一級（重労働）：伐採・炭鉱・作業等

二級（中労働）：貨車荷物の積み降ろし等

三級（軽労働）：鉄道建設（路盤の基礎作り）

ソホーズ・コルホーズ（集

団経営の農場）の作業

オカ（体力練成）：作業免除・室内外の清

掃・軽作業

作業は、八時間労働がキチツと行われた。

給食は、定められたカロリー計算で給せられたと思うが、平均的に次のようだった。(等級別・関係なし)

朝食 米、燕麦の粥食(飯盒の蓋三分の二くらい)

昼食 黒パン(握りこぶし位) 一個(三百五十グラム?)

夕食 ポタージュ(飯盒の蓋三分の二くらい)

基本的に右記のようなメニューで繰り返されていた。

副食おらずに練の輪切り漬け、キャベツの漬物、ジャガイモの炒め、煮付け等が付く事もあった。

昼食は、前日の夕食時にパンが配られた。いつも空腹感があり夕食時に翌日の昼の黒パンは、胃のなかに消えてしまう事が往々にあった。翌日の昼は、空腹を我慢して昼寝で凌ぐのである。

食事の量の少ないのは、ソ連関係者の役得、横流し等があったとも言われていたが、真実は判ら

ない。

総体的数量が少なかったから、分配には各班からの係が出て厳正?に行われた。

スチーム暖房だったと思うが、日中室内が寒くて震えるという事はなかったように今は思う。寒く感ずるときは、防寒外套をひつ掛け凌いだ。

体の温度は「虱」の繁殖には適温だったようで、肌着の襦袢、股下、ふんどし等縫い目にいっぱい列をなし、暇があればこれを潰すことが日常の日課のようになっていた。熱湯に沸かした大きな釜に交互に何着かを入れ煮沸消毒と称し、退治を試み、また夜間氷点下四〇〜五〇度に曝す寒中消毒にも効果無く、タマゴ(幼虫)は生きており、すぐ成虫し我々を悩まし続けた。

人によっては、発疹チフスを誘発、高熱の上、死にいたることもあるといわれる厄介なしろものであった。

排泄物は、人間にとって大切であり、收容所に相応の施設は無く、緊急に戸外に便所として三メ

一トル×五メートル位・深さ約一メートルの穴を掘り三〜四センチ幅の丈夫な板を十枚適当な間隔に架け大使用とした。少なくとも板に跨ぐ人員は定員二人、混む時間帯は各人了解？のもと三人が使用した。小便は、決められた場所に用を足した。

大は、下から積重ねられ三角状に凍った。頂点が近づけば渡し板を移動し使用した。満杯近くなれば各班よりの使役により、これを砕きロープで結えた金物の盥に積み雪道を二人で引っ張り農地に運び肥料用にと捨てた（大便は、寒さのため下から凍って三角形状となり臭み匂いもなかったが、作業中に撥ねて衣服に付着したものが収容所に帰って溶けた時、匂いが戻った）。夜の用便は大変難儀だった。ご老体の少尉の方は、澁瓶シジビンを離さず持ち歩いておられた。

この収容所で一年間、百人余が栄養失調・発疹チフス・肺炎等、合併症で亡くなった。近くの丘の上の雑草地に埋葬された。今は場所、面影も無いと言われている。

帰国のお告げ

昭和二十一年元旦、門松もなくお飾りもなく、お互い故郷のそれぞれの行事を思い、神棚に手を合わせお屠蘇、お雑煮を父母はじめ家族一同今年も皆元気に過ごせるようにと、和やかな食膳風景を思い起こし、それぞれ故郷の正月行事等を話し合い一日も早い帰国の日を願った。

そんなある日「狐々様コノコサマ」のお告げがあったと噂が流れ始めていた。

それは、帰国の日のお告げだという事だった。信ずる者、相手にしない者、まちまちだったが、お告げがあったと言う人に、皆で祭壇を作り正式に拜んで貰い確認しようという事になり、一月のある日曜日、空き箱に白布をかけ、紙に「〇〇大明神」と大書し、誰かが黒パンを供え灯油（夜間の灯油）を灯し祭事が始まった。二十人近くが集まり見守った。やがて「帰国の日は、三月三日である」とお告げがあった。皆驚喜しそれぞれ居住区に戻った。指折り数える者、信じないけれど密

かに期待を抱く者、皆すぐ故郷を思いだし一日も早く帰国できる事を願った。

二月に入り收容所の周辺が慌ただしくなった。中旬以降收容所のソ連将校の動きや出入りが忙しくなったように見えて来た。やはり帰国間近と信じ殆どの者は人知れず心の準備、身の回りの準備を始めていた。また病人には「頑張れ、すぐだぞ」と励ましていた。下旬になると一層忙しさが増しているように見えた。

三月に入った。いよいよ、帰国の日が来るぞと誰もが思っていた。

ソ連の動きが全く無い。おかしいなと思いつつも、期待は消えなかったが、二日の夜の点呼でも「命令会報」なし。ソ連は急に命令を出す事もあるからと、明日に運命をかけた。三月三日の朝を迎えた。その日一日何の動きもなく平穩に過ぎ、我々には幻の三月三日になってしまった。

【執筆者の紹介】

出生地 岩手県盛岡市

出生年月日 大正十四年九月二十日

学歴 岩手県立盛岡商業学校卒業

職歴 海軍航空技術廠・総務部

(横須賀市・深浦)

入隊年月日 昭和二十年二月十日

入隊地 青森県弘前市

入隊部隊 東北部第五十七部隊・即転属

第七師団歩兵第七十七連隊

(満州第二〇一部隊)

戦闘 満州西部国境 西口・呉什台

軍旗中隊として、戦闘参加

入所 昭和二十年十一月二十二日

收容所 チタ州 ハルボン・カクイ・シルカ・

ナホトカ 四收容所

復員年月日 昭和二十二年四月二十五日

復員船 明優丸

復員後の職 岩手トヨタ自動車・岩手県自動車整

備振興会・盛岡身体障害者協議会

全抑協活動 岩手県慰霊事業実行委員

現住所 岩手県盛岡市桜台

家族 妻、長男

(岩手県 田辺 壮久)

無題

栃木県 橋本 正男

1 ①新潟県中魚沼郡上郷村宮野原

村立宮野原尋常高等小学校高等科

昭和三(一九二八)年三月二十五日卒業

卒業後は出生地にて農業に従事

②家族は、父 母 長兄 次兄 姉 弟 妹
弟 弟と十人

長兄は家を出て建設会社に勤務する

次兄は現役にて北朝鮮会寧にあつて工兵

姉は部落内の農家に嫁す

弟は志願して北朝鮮の騎兵隊に入隊

妹と弟二人は学校に通っていた

2 ①昭和十六年七月十五日、赤紙にて高田歩兵三

〇連隊に集合し、三日ほどして大阪より朝鮮

釜山を経て羅南歩兵七六連隊補充隊へ入隊。